こども庁

―「こども家庭庁創設」という波乱の舞台裏―

山田太郎

こども庁

―「こども家庭庁創設」という波乱の舞台裏―

山田太郎

星海社

268

SEIKAISHA SHINSHO

2021 1.24

菅義偉内閣総理大臣との
面談のため
首相公邸を訪れる

菅義偉総理と面談した首相公邸の外観（出典：首相官邸ホームページ）

はじめに

２０２１年1月24日。とても寒かったけれど、よく晴れた運命の日曜日。
日本のこども政策の歴史が大きく動いた日となりました。

人影のない日曜日の午後の永田町、私は夜通しで作った提案書を手に、時の宰相〝菅義偉内閣総理大臣〟との面会のため、冷んやりとして静まり返った首相公邸に向かいました。
4日前、突然官邸から連絡があり、総理からの面会の要請を伝えられた時は、正直驚きました。いち議員の私に、総理から直々のお呼び出しがかかるとは露ほども思っていませんでしたから。同時に、「これはチャンスだ！」、そう思ったのも確かです。

菅総理からのリクエストは「政治におけるネット活用について意見を聞きたい」というものでした。

２０１９年7月に行われた第25回参議院議員通常選挙で、私は自民党の比例候補の中で一番を目指し、53万票の得票を目標に掲げました。その後、ツイッターやＬＩＮＥ、動画などネットを中心とした選挙活動を行い、54万人超に投票していただいて当選。これが「ネット選挙」などと注目されたことから、菅総理は私に、特に「若者に向けてＳＮＳをどう活用するのか」意見を聞きたいとなったわけです。

面会時間の予定は、10分～15分しかありませんでした。

しかし、国会議員になって以来、野党時代から主張し続けてきた「こども庁」の創設案を、直接総理に訴えられるのはこの機会しかない、そう確信したのです。

「この国のこどもたちが置かれた危機的な状況を、なんとか改善したい。そのためにはこどもの問題に真摯に取り組み、責任を負うリーダーシップが絶対に必要だ」この思いを胸に、議員としての仕事を続けてきました。虎視眈々とこの日を待っていた、とまでは言いませんが、「いつか機会があれば、必ず」との思いを抱き続けてきました。

大急ぎで、事務所のスタッフの力を総動員し、提案書と関連資料をまとめることにしま

した。総理との面会までは4日の猶予しかありません。

しかし、事務所の秘書たちからは、猛反発を食らいます。

「総理が希望されている面会の趣旨と、全く異なる提案書を出すべきではありません。自民党一年生議員としてあまりに図々しすぎます！」と皆、声を揃えるのです。

それはわかっています。しかし、そんなことは言ってられない。

今しか「こども庁」について、トップに提言するチャンスはないのです。非常識でも図々しくても構わない。こども達を救うためには、総理直轄の責任部署として新しい庁をつくるしか道がない――そう確信していました。

もちろん、いち議員が総理に突然、新しい庁の創設を提案するなど、そう許されることではないのかもしれません。しかし、それでもいい、と覚悟しました。

元々私は空気を読めない人間なのでしょう。しかし、これが強みでもあると思っています。

思い起こせば、会社を上場までさせた私が、急に経営者を辞め、２０１０年に当選の見

込みもほとんどない参議院選挙に出馬したときも、空気が読めない人だと散々言われました。

最初に出馬した参議院選挙の得票数は、３万６６３票。比例名簿登載者中10番目で落選でした。ところが、２０１２年12月に私の上位にいた3人の参議院議員が衆議院議員選挙に立候補するために議員を辞職したため、繰り上がり当選して最小得票当選者となってしまったわけです。空気を読まず、〝棚ぼた〟のように、議員になったのが私です。

しかし、せっかく議員になったのだから、「やりたいと思うことはなんでもやってやる」と心に決め、全力で議員活動に邁進しました。特に力を入れたのは、ネットの声に耳を傾けることです。特定の支持団体を持たない全国比例の国会議員でしたので、ネットを通じて一人ひとりの国民と直接対話しながら政策を考えていきたいと考えました。その中で、「表現の自由」が脅かされている、守ってくれる国会議員が必要であるという声が多く寄せられました。これらの声は切実で、強く心を動かされました。そこで、私は、「表現の自由」を守ることを重要政策として掲げ、議員活動の中心に据えたのです。「票にも金にもならないからやめておけ」という周りの声を無視し、空気を読まずに。

反対する秘書を説得し、なんとか事務所が一丸となって提案書と関連資料をまとめあげ、公邸で菅総理と対面。その際、私が最初に総理へ発した言葉は忖度なしの一言。

「総理、ＳＮＳの活用方法が重要なのではありません。大切なのはＳＮＳで発信する政策の中身です」

一国の総理に向かって、一年生議員がこのように言い放ってしまいました。

「自民党に居場所がなくなるかな……」との不安が脳裏をよぎりましたが、もうこうなれば、はっきり言うしかありません。私は、どの派閥にも属さず、特定の団体からの支援ももらっていません。元々切れた凧のような議員なのです。

総理から求められたことにしっかり応えるなら、はっきり言ったほうがいい。そう考えて総理にはズバッと言いました。

「首相官邸のアカウントで、総理が流しておられるツイートは、はっきり言ってただの〝日誌〟です。日々、どこに行き、何をしたかを記録する総理のツイートなど誰も求めていません。もっと熱量を持って、何を考え、どう行動するつもりか、メッセージを伝えなくては何も伝わりません」と。

それから、私は「総理、〝菅義偉〟でエゴサした結果を見てください」と言って、批判の声も賛同の声も含め、ネットのリアルをその場で見せました。「これが国民の声です」と。

「……」

総理は、驚いたような顔をしていましたが、「なるほど」とうなずいていました。

ＳＮＳについての話はそこで終了。ここからが肝心です。私は突然、エクセルの表をまとめた資料を総理の前に出しました。

「総理が先日（２０２１年1月）行った施政方針演説、あれでは菅政権が進めようとしている政策が国民に伝わりません」と。

よく言ったものだと自分でも思います。しかし、菅総理はその演説のなかで、『不妊治療』『三十五人学級』など具体的ではあるものの細かすぎる施策ばかり並べていました。ただし、一方で、『防災』『デジタル化』など時代が必要としていることについても言及していました。ですから私は、そうした政策を『こども庁』『デジタル庁』『防災情報庁』と、まず大きな枠組みを整理して進めたほうがいいのではないか、とそういう提言をしたのです。

さらにその後、聞かれてもいないのに、私は、わが国のこどもたちが置かれた状況につ

いて大量の資料を示して説明を始めました。

最大15分間の予定時間を大幅に超えて、私は1時間ほどかけて、事務所で作ったパワーポイントの資料を使って、一枚一枚丁寧に今の日本のこどもたちを取り巻く危機的状況を説明し、それらの諸課題を解決するための司令塔として『こども庁』をつくる重要性を訴えました。

菅総理は、普段から非常に寡黙な方です。私が話している間、ほとんど声を発することがありませんでした。時折うなずきながら、静かに聞いていたのです。

総理の反応は読みにくく、正直戸惑いましたが、とにかく最後まで私の話を聞いてくれました。そして、「携帯電話の番号を教えてくれ」と帰り際に言われたことで、「繋がった！」とかすかな希望の光が見えた気がしました。

そして、その2日後、加藤勝信官房長官（当時）から私の事務所に直接連絡が入りました。

2021年1月24日　菅義偉総理に提出した2種類の提案書（撮影：山田太郎事務所）

「総理が『こども庁』に大変興味を持っている」と。

菅総理と首相公邸で面会した日、こども政策の歴史が大きく動き、それから約1年半、私たちの必死の闘いが繰り広げられることになります。

「こども家庭庁」創設に至るまで、順風満帆とはとても言い難いものでした。議論がとん挫しそうな危機は何度も訪れましたし、多くの反対にも遭いました。名称問題についても、紆余曲折がありました。

それでも、信念を持って行動していけば、政治や世論を動かすことができる。

多くの仲間や協力いただいたさまざまな方々、何より国民の後押しによって、ひとつの庁をつくることができたのです。２０２１年、２０２２年の国会は「こども国会」と言われる程、さまざまなこども政策にまつわる議題が国会の内外で主軸として議論されました。これまで、こども政策が国会で中心の議題になることなどなかったことを振り返ると、今は、隔世の感があります。

本書は、総理への「こども庁」の提案から、「こども家庭庁」ができるまで、約1年半に

わたる軌跡を追ったものです。

「こどもまんなか」の大切な政策を進めるにあたり、「こども家庭庁」や「こども基本法」などが、どのような考えや議論を経てつくられたのか。そこに深く関わった当事者として、その舞台裏を含めて記録したものです。また本書は、私自身の「２０２１年の物語」でもあり、この大波乱の１年半をともに乗り越えてくれた、仲間たちの想いの記録でもあります。

議員や強い思いのある関係者の一人ひとりが諦めずに動けば、政治は変わる、世論は動く。

多くの方々に、関心を持ってもらえたら幸いです。

面談後、菅義偉総理と首相公邸にて
（撮影：山田太郎事務所）

目次

はじめに 3

第1章 それでも政治は動かないのか？ こどもが置かれた現状と「こども庁」の必要性 21

1. 誰がこどもの命を救うのか——日本のこども・子育て世代が置かれた状況と課題 23

こどもの命が守られない日本 24

家族関係社会支出は先進国の中でも最低の日本 25

2. 穴だらけのこども政策——政治のゆがみが招いた3つの事件 27

こどもたちからのSOSに誰が対応するのか 28

北海道第二の都市で見た！ 穴だらけの事件対応 31

いじめ対策の3つの致命傷 33
こども政策の地域格差 34
3. 司令塔は誰だ！ 責任者なきこども政策の執行体制 36
川遊び中に亡くしたわが子――その死因がわからない 37
死因の究明無くして再発防止はできない！
失われた4500名もの命とCDRの重要性 39
4. 「こども庁」は時代の要請！ こども政策をユニバーサルサービスに 41

第2章 こども庁提言への前哨戦

創設に向けて動き出す 45
1. 野党時代から公約に掲げたこども庁創設 47
将来に不安を感じる若者の姿に衝撃 47

2. 社会的養護への関心が原点 49
乳児院の現状、社会的養護のあり方への疑問 50
3. 諸外国のこども政策——2015年10月ドイツ・イギリス視察へ 52
親権問題のあり方を考える 53
質を向上させるための社会的養護の「中口」論と「出口」としての家族統合 55
「個人」が尊重される韓国の児童養護施設 58
4. 野党時代、2016年2月最初の「こども庁創設」の要望書を提出 60
こどもへの性虐待は誰が防ぐのか 62
5. こども庁提案の前夜 64
児童福祉法の改正 65
こどもの育成をサポートする「成育基本法」 66

産前産後のお母さんの命も守る「産後ケア法案」 67
子供・若者育成支援推進大綱の見直しに携わる 68
党内に少子化対策調査会をつくる 69
マッチョな自民党が変わり出した瞬間 70

第3章 普通にやったら潰される!? こども政策を先導したゲリラ組織の勉強会 73

1. 勉強会発足の背景と自民党若手の呼びかけ人30名 75
戦略① 中堅若手・副部会長以上、派閥配慮 来るべき衆院選の公約へ 77
戦略② 自民党の政務調査会の外側に「勉強会」をつくる 79
戦略③ 総裁選を意識して370名の地方議員の巻き込み 80

2. 「Children First のこども行政のあり方勉強会」スタート 81
専門家と当事者の声にこだわった 84

「デジタル民主主義」としてのネットアンケート 86
自民党初の試み――全国知事会・地方議員との協議 92

第4章 山は動いた！ ～菅義偉総理の決断～ 95

1. 2021年4月1日、菅総理への提言申入れ 97
党と政府を動かした二階幹事長との会談の舞台裏 99
自民党内に総裁直轄の本部を創設 103
自民党「「こども・若者」輝く未来創造本部」発足 104
2. 意外な人事、福井照議員が事務総長就任、キーワードは「こどもまんなか」 106
党内外の動き ①文部科学省の抵抗 109
党内外の動き ②マスメディアの論調（幼保一元化への執拗なこだわり） 113

第5章 突然の菅総理の退陣表明 こども庁提言、絶対絶命の危機 115

1. 突然の菅総理の退陣表明 117

2. 自民党総裁選による「こども政策公開討論会」実施までの裏側 119

「すべりこみ」の有識者会議開催 122

色とりどりのバルーンやユニコーンにびっくり 124

3. 運命の討論会から、岸田政権にこども家庭庁創設が引き継がれるまで 127

岸田政権発足、野田聖子議員がこども政策担当大臣に就任 133

第6章 こども庁・こども家庭庁の名称問題勃発 法案国会提出の閣議決定に間に合うかの攻防戦 135

第7章 諦めるわけにはいかない！ 困難を極めた「こども基本法」制定 145

1. 「こども基本法」への激しい反発 147

2. 遅すぎる28年越しのこどもの権利の議論 151

3. こどもコミッショナー設置の必要性 155

コミッショナーの必要性と海外の事例 155

コミッショナー制度に関する日本の現状 158

第8章 国会最終日、ギリギリ可決に漕ぎ着けた法案 険しい山を上り詰めて 161

1. 法案成立直前、会期末までの攻防戦 163

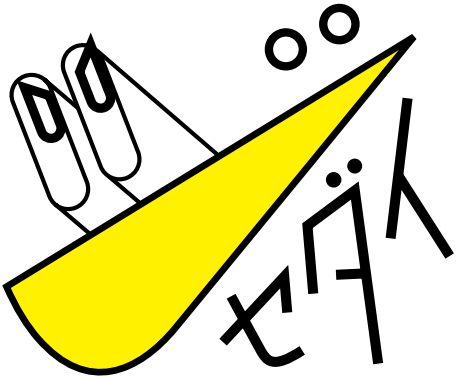
こども家庭庁設置法とこども基本法が同日に成立 167

2. こども家庭庁の役割と範囲を巡っての議論の内幕 171
①いじめ 171
②不登校・こどもの障がい 175
3. 岸田総理へのこども家庭庁創設の時の国会審議 178

第9章 こども家庭庁の役割とこども政策推進のために 今必要なこと――

1. こども家庭庁の役割 183
2. これからの「こども政策」展開の課題 186
①地方への展開――こども家庭センターを必置へ 186
②民間団体（非営利団体）の参画を促す 190
③個人情報保護法の課題解決 191

④予算検証・ＥＢＰＭで確実な政策実行 193
3. こども家庭庁とこども基本法で、社会は変わっていくのか 195
最終章 政治を動かすということ 199
謝辞 207
こども家庭庁創設に関する年表 211



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!